

(3) 3 学 年

1 はじめに

「先生、同和問題の授業……もう、したくない。同和問題の授業のときが一番つらい思いをします。」という。「本当のことをいえば先生のことも私は疑っている。」という生徒がいる。学年の意見発表会のとき部落宣言し、父母の気持ちについて話そうとしたときに絶句し涙を溜めた生徒がいる。地区の生徒が顔を上げ、胸張って受けることのできる授業。地区外の生徒が自分の本音に向き合いその苦しさに関心する生き方を問うことのできる授業。そのことを大きな目標に掲げながらもまだまだ道は遠い。常に体を動かし生徒と共にありたいと願いつつの実践も、思いばかりが先走っている現状は、私たち教師自身の同和問題にかかわる姿勢を問い続けられた日々でもあった。

しかし、ともかくも昨年より今日までの1年半の私たちの実践を振り返り、それをまた明日からの新しい日々を乗り越えていくための手立ての一つとしたい。そんな思いを込めて学年の実践の一部を紹介したい。

- (1) 「同和問題の解決は国民的課題である。」といわれて久しい。私たちは同和問題の解決にかける思いは変わりはないつもりであったが、そのための具体的な取り組みや姿勢については差があることを認めざるを得なかった。このことは我々教師にも生徒にもまた保護者にもいえることである。私たちの同和問題学習はこのことを認識することから始まった。「みんなで共に考えていこう。」「互いに教え合い、助け合いながら進んでいこう。」という姿勢は、教師集団はもちろん、生徒をも含み込んだ私たちの基本的な姿勢である。「仲間」という言葉を本当の意味で使うことのできる集団でありたいと願い、試行錯誤しながらも、ともかくも実践を重ねていく以外にないと考えた。
- (2) 言葉の問題がある。例えば「同和問題は命にかかわる問題である。」といい、「同和問題学習は人間としての生き方を問うものである。」という。「命」とは何なのか。「人間として」というのはどういうことなのか。私たちはこれらの言葉を「知識」として知っており「知識」として使っているにすぎないのではないかという反省がある。この言葉の意味を「知識」としてとらえる段階から、感覚的に納得し、自分のものとし、実践に移すことのできる段階にまで進めるためにはどうすべきか。そのためにはまず私たち教師自身が本音を語り、いわば体当たりの実践を積み以外にない。その中からこれらの言葉の意味を生徒と共につかむことができいくかも知れない。言葉が正確に自分のものとして使えるとき「ほんもの」に一步近づいたと考えてよいのではないか。私たちは言葉を大切にしていきたいと思う。
- (3) 学級には学級としてのカラーがあり、それぞれの実態に合わせた実践がある。しかし、私たちは同和問題学習については常に学年全体が同一歩調で歩むことを目指した。それは私たちの問題意識や自覚——もっといえば解放にかける情熱——を最も高いレベルにある同僚と同じ位置にまで引き上げようとするのであり、全ての生徒を同じ位置まで引き上げようとするのであり、また、一人の生徒の悩みや不安を全員が共有していこうとするのであり、教師としての苦しみ

や迷いを分かちあおうとすることでもあった。従って、同和問題学習についての学級としての取り組みを語ることになり、学年の取り組みはそのまま学級の取り組みにつながる。学級、学年が一体となった取り組みは私たち自身の大きな励みとなってきた。

2 全員で取り組む同和問題学習（全体学習）

(1) ねらい

- ① 私たち教師の実践はまず授業からでなくてはならない。

同和問題は生活の場全てに及ぶ問題である。放課後、家庭訪問などで足を運ぶことも多い。個々の生徒の悩みや問題に対応するために個人を対象にした話し合いもある。あるいは進路保障や学力保障のための活動もある。全てがどれ一つとして欠くことのできない問題である。しかし、私たちは教師としてまず授業を作り上げていくことを第一に考えていくべきだと思う。授業の場において出される問題点や本音があってこそはじめて同和問題は全体のものとなっていく。私たちがしなければならないことは被差別の立場にある生徒に対する働きかけと同時に、いやそれ以上に地区外の生徒に対する強い働きかけである。「部落差別は差別するものが存在するから起こる」ことを考えればごく当たり前のことである。この地区外の生徒への働きかけは授業という場において他にはない。子どもたちを変えていく一番大きな力になるのは同級生という仲間の支えである。それを作り上げる授業を組織し実践してこそはじめて教師としての同和問題学習の指導が始まる。

- ② 担任が自分の学級だけで取り組む授業にはどうしても甘さがでる。切磋琢磨することがない。また研究授業ではその1時間だけの取り組みにおわってしまうことが多い。それを越えるためには自分自身を「取り組まざるを得ない場」に追い込む必要があった。私たちは理念がなければやっていけないが、理念だけでもやっていけない弱さがある。ともかく続けるなかから何かをつかむことができるであろう。それを続けるための一つの手だてとして考えたのがこの全体学習であるといっよい。自分自身の弱さを認識したところからスタートした全体学習である。

- ③ ②で述べたことはそのまま生徒にもあてはまる。全体学習における一人の生徒の発言が全体を引っ張り上げることになるだろう。その生徒が席を置く学級だけに留まらず学年全体に波及させることができる。常に全体を、今望みうる最高の水準に置くことができるのではないかと考えた。結論からいえばこのねらいはかなりの部分において達成できたといえる。後でも触れるが、2年生から3年生への学級編成において新しい学級全てが同和問題学習において同一水準にあり2年生での学習の上に3年生としての学習を積み重ねることができた。学級における差がないということは、学習を積み上げていく場合には欠かせぬ条件であった。

(2) 具体的な方法と手順

- ① 一つの学級の授業を学年全員が参観をし（公開授業。このとき授業をする学級を公開学級という。）引き続いてその授業の主題又は内容について学年全体で話し合いを行う（全体授業）。この2時間連続して体育館で行う授業を全体学習とよぶこととした。研究授業を教師だけが参

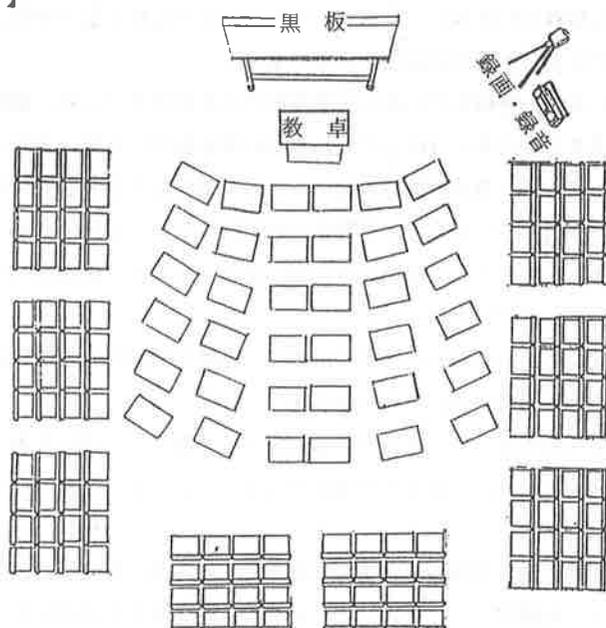
観するのではなくて全生徒に参加を求めることによって我々教師も生徒も同和問題学習により真剣に積極的に取り組むことができるのではないかというのが当初の考えであった。昨年度より全学級が3回の公開授業を行った。従って15回の全体学習に取り組んだことになる。

② 方 法

- ア 公開授業に使われる資料を学年教師全員で検討をし授業者は指導案を作成する。
- イ 公開学級以外の学級も公開授業までに授業を実施する。その際の指導案は公開授業者の作成したものを使用することを原則とする。
- ウ 公開学級の授業を全員で参観する。参観者は資料、メモを用意する。
- エ 公開授業終了後、10分間の休憩の後全体授業に移る。この際の指導者は公開授業の指導者とは異なるようにすることを原則とした。また、私たち自身の研修のためにも授業はビデオに取り、公開授業、全体授業ともに必ず授業記録を取るようにした。
- オ 全体授業においては指導案を作成せず、同和問題学習の内容に立ち入る前に、公開学級の話し合い活動に関しての意見を求めその後に内容に入っていくようにした。その授業において問題になった点や深まりが不十分であったと思われる点について授業者の判断で授業を進めるようにした。
- カ 次にそれぞれの学級に帰り、短学活の時間を利用して500字前後の感想や意見、思いをつづり提出させる。
- キ それらの感想や思いのうち考えさせられる内容については学年通信「ねんりん」に掲載し、全生徒に再度家庭で話し合うための資料とした。

③ 全体学習の形態

【授業形態】



(3) 実践例

① 「私の目を見て」全体授業（授業者 森口教諭 平成2年12月13日）

【授業記録 — 抜粋】

- T 自分自身の差別心を洗っていくような同和問題学習が、愛子はできていただろうか。みんなに聞く。自分自身の中にある差別心を洗うような同和問題の学習ができていだろうか。私の中にあるだれかを見下げる心、だれかを踏みつける心、自分以下を求めていくような、差別心を洗っていくような同和問題学習ができていだろうか。みんなが社会にでていくとき、板野中学校で勉強したことがずっとつながってって、差別を許さないという生き方を貫くことができるかどうか、みんなに問われていると思うんです。もう一回言います。みんなの問題です。私は部落に生まれなかったから関係ないのではないかと私は部落に生まれたから部落差別はしないのか。部落差別は全て人間の問題です。また、部落に生まれた人だってちゃんとした同和問題の学習をしていかなければ、より下を求めて人を差別していくようになるんです。全ての人間が、自分の中にある差別性、差別心を洗いながら、今の自分ではいかんと思ひよりよい生き方を考えていく。それがこの学習の意味だと思うんです。今全体の場では愛子さんについていろいろな意見を出してもらいましたが、今一度この授業に寄せて、それぞれの思いをかみしめて欲しいと思うんです。
- KS 部落差別とは別のことになるけれど、人のことを陰でコソコソ言う人が多いんです。コソコソ言わずにその子に言ってあげたら、その子も悪いところをなおすことができるので、いじめめみたいなのはなくなると思います。
- EA もう少し一人一人が差別のことを考えたら、少しずつ差別はなくなると思います。
- YI みんな差別をなくしていこうというし、私もなくしていかなあかんと思うけど、学習していても結局なくせないというか、どこかで止まってしまうから、これは自分でちゃんと学習できてないのかも知れないけれど、私みたいなのが愛子さんだと思うから、もっとみんなで深くやっていけたら自分も変わるかなあと思います。
- SN 私は間違っていることを信じている人に本当のことを教えていって、勇気を出さなくても自分の出身地を堂々と言えるようにしていかなければならないと思います。
- MK 僕にも差別心があって、自分の気付かないところで差別してしまっていると思います。
- TN 僕はまず自分が差別していることに気付かなければならないと思います。
- KM 私にも差別心があると思うので努力して差別心をなくせるように頑張って、私から身の周りの差別をなくしていきたいと思います。
- KM こんなこと言ったら怒られるかも知れないけど…私は差別があると先生から教えられて…それは先生たちが…部落出身…。（絶句する）
- T 先生に言わせてくれるか。YIさんがさっき言うてくれたし、今のKMさんの心の声がどれだけみんなに届いているか。本当の仲間になっていく。そんな部落問題の学習をしていきたいと思う。
- …略… この問題を自分自身の生き方の問題としてとらえ、許さない、許せないんだという生き方をこれからも勉強していきたいと思います。涙を流すものがない、本当に今日も学

校に来て良かったと思える教室でありたいし、関係でありたいし、学年でありたい。そのために、自分はこの問題にかかわってどう生きるのかという中で、この同和問題の学習をみんなまで深めていけたらと思うんです。頑張りましょう、終わります。

【授業後】

- 全体授業での発言は、M子の精一杯の言葉であり、まぎれもない、部落宣言であり、生徒にとっても初めての衝撃的な授業となった。身近にある問題でありながら、ことさらそれから目を反らし、うわべだけをつくらってきた今までの授業に対する反省を求めたものであるととらえることができる。授業後M子の周りには多くの生徒の輪ができた。このM子の発言の重みを感じ、自らの生き方を考えようとする第一歩を記す輪であったといってよい。この発言がきっかけになって全体学習においても同和問題を自らの問題ととらえた本音の発言がみられ、授業そのものが質的に大きく向上していくことにつながるようになった。

M子は次の日の朝担任に次のような手紙を書いてきている。

「私、すごく同和問題の授業をしているときが一番つらい思いをします。クラス全員が私の方を見ているような気がします。また思うことなんだけど、みんな心の中では部落出身でなくて良かったと思っています。私だって中学1年のときは他人ごとのように思っていました。でも、いざ自分だったと気付いたときは、とても悲しかったです。そして、とてもつらくて心の中では、これから隠していこうとさえ思っていました。これが差別心なんですよ。私みたいに考えている子がたくさんいるから、差別がなくならないんです。でも、先生たちが一生懸命考えてくれている姿をみたら、本心を言わねばと思わずにいられませんでした。今日から自分の間違った考え方をなおしていきたいです。そして、あまり涙を流さないようにしたいです。」

また、他のクラスの一人の生徒が次のような生活ノートを担当に提出した。

「…M子さん自身、隠しておくのがいやで、そしてみんなにわかってもらいたかったらしいです。それからみんなに違う目で見られているようで怖いそうです。今日の授業のときも、みんなにわかって欲しくてそのことを言おうとしたけど、涙がでてきていえなかったといっていました。…（授業の後、何人かで集まったときに）M子さんは、少し泣き止みました。『私、もう同和問題の勉強したくない』M子さんが言いました。みんな一瞬考えました。私は『M子さんみたいにつらい思いをする人がいないように学習しようよ』といったけど、あとでけっこう考えた。もし、同和問題の勉強をしなければ、自分の子どもに何も教えてあげることができない。そのままにしておいたらどうだろう。何も知らずに育てて友達をつくって、そしたら差別はなくなるかも知れない。本当にそれでなくなるものだろうか。正直いって自分の心から、差別の心をまったくなくすことはできないと思う。部落差別がなくなっても、やっぱり自分以下を求める心は残るだろうなあとと思う。そのために、部落差別やいろいろな差別、自分の中にある差別心、自分以下を求めようとする情けない心、そんな思いを美しくしていくために同和問題の学習は、大切に続けていかなければならないと思う。私は、口先だけで、差別はいけない、差別をなくそうと言ってきた。また、いろいろな資料を使って学習してきたけれど、今日、M子さんの涙をみて、M子さんの訴

えを聞いて初めて本当に部落差別を知った。すぐつらかった。情けなかった。このことは誰かが言うてくれなかったら、わからないことだったと思う。私は大事な何かを知らんと大人になるところだった。」

- 私たちはこの全体学習の後から、同和問題を「教える」ことの苦しさを初めて実感としてつかんだ。私たちも本音をぶつけていけない限り同和問題学習を生徒とともに語ることはできない。「子どもに教えられる」ことの意味がわかり始めたのがこの授業からである。「一人の生徒の苦しみさえ支えられないで何が教師か、まして、まだ口を開くことのできぬ多くの地区の子どもがいるではないか。自分をさらけ出し、ともに苦しむことなくして同和問題学習はありえない。」そんな共通の思いが生まれたときでもある。

② 「きず跡」全体授業（授業者 森口教諭 平成3年5月17日）

【授業記録 — 抜粋】

- T 授業についてでもいい。同和問題について思っているものを語り合いたい。そして何かをつかみたいと思う。
- Y I 私、思うんだけど、最初のころはいろんな資料を勉強してよかったんだけど、他人ごとのように思って、先生に注文なんだけどもっと身近なところで勉強していきたいんです。
- A S 私、家族と一緒に同和問題について話し合ってますけど、将来ネ、私が地区の人と結婚したらと言ったら、父と母は、えっと、父と母は言うんです。地区の人は汚い、S家の誇りが汚れるというんです。私はそんなもんかなーと思ったんだけど、やっぱり差別というのは人の心を殺したりするし、私、もっともっと差別に抵抗していく勇気を持っていきたい。
- T 今、言ったこと、Sさんのことだけじゃないと思います。そういった悔しさを味わった人もいます。Iさんが言った、身近な資料を使って話し合いたいということにも意見を付け加えてください。
- S N 私もIさんやSさんと一緒です。この作者の人も資料とか、学校でたくさん勉強していたと思うんです。でも、身近な差別のことをちゃんと勉強していなかったと思います。だから、正面から差別にぶつかったとき、その、どうしていいかわからなかったと思います。それから、Sさんちだけでないんです。うちのおじいちゃん、おばあちゃんもそういうこと言ってきたし。いまはそんなに言わんけど。やっぱり、それって小さいときから言われてきたし。地区に生まれた人は性格がいやらしいとか。そういうことずっと小さいときから思い込んでいたので、まだ抜け切らんけど、いっぱい勉強して、ちょっとずつでも変わっていきたいです。
- Y I Nさんと一緒に、じいちゃん、ばあちゃんきつくて。今でもあそこに遊びに行ったらあかんと言われる。ほなけん、私とかも全体授業で結局いいこと言っても、今になってこの人みたいに部落の人と結婚するかと言われたらわからんし、もし、おじいちゃん、おばあちゃんから、あの子とつきあわれんと言われたら、一歩引くし、私、ケンカ早いからけんかしたよ、と言ってけんかしよる子の名前言うと、じいちゃんが「その子とはけんかしたらあかん」と

言われたら、やっぱりその子みる目が変わってきたし。結局、資料をやったって遠くのことまで考えてしまって、結局言うことはきれいごと。先生によく思われたい。みんなに嫌われたくない。そんなこと考えてするけん、そんなじゃけん、この問題はなくなるらない。

Y Y Sさんの意見に対してなんですけど、Sさんは両親に自分から部落問題のことを話せるからすばらしいと思うんです。というのは、私も家族の団欒のとき、部落問題のことがひっかかったりすることがあって、それを言ったら、うちの両親はどちらかというところの学習に十分でなかったと思うんです。だから部落のことについてどう思うかと尋ねても、絶対答えがわかっているというか、そんなことと思います。私はだから聞き出させないんだけど、Sさんがそれについて聞いたというのは勇気があるしすばらしいと思うんです。

T できるだけ多くの人が語り合える時間にしたい。言葉は短くていい。それぞれみんな立場があるだろう。部落に生まれた、部落に生まれなかったという立場があるだろう。この前の授業で、先生が言った、部落に生まれたことが恥ずかしいのか、部落に生まれたということで差別する方が恥ずかしいのか、どちらか頭の中ではわかる。でも、先生、私は部落に生まれたのが恥ずかしくてたまらん。学校でその話をすると顔から火が出るくらい赤くなる。そういう苦しみはどうしたらなくなるのか。どうしてそんな気持ちになるのか。みんなが本当に語り合える仲間になり、そしてこの問題を本当に解決していく関係になるためにも議論していきたい。家のことを話すのはつらい。じいちゃん、ばあちゃん、とうちゃん、かあちゃんのこと、絶対に差別がある。そういうことを語るのはつらい。でも、身近なこと、起こったことを勉強したいと言った。そういう自分の生き方、生き方にかかわることを、やっぱり訴えていかんとこのことは変わっていかんと思う。重苦しいけどみんなが思うことを語って欲しい。

MS 私の経験からはなすと、何も部落について勉強してないとき、小学校のときみんなと徳島へ遊びに行ったんです。バス乗り場で、おばちゃんに「どのバスに乗ったらいいんですか」と聞いて仲良くなったんです。それでそのおばちゃんに「どこから来たんえー」と聞かれて、「板野から来ました」と言うと、いきなりおばちゃんの態度が変わったんです。私は部落のことを勉強していなかったのだから、なんでそのときおばちゃんの態度が変わったのか、わからなかったんです。でも、中学校に来て部落のこと勉強して、なんしにおばちゃんの態度が変わったんかわかって、勉強してとてもよかったです。そのおばちゃんに「なんで態度変わるんえー」と勉強してなくて何も言えなかったことがいまでもつらいです。…後 略…

【授業後】

- 「もう差別はない」と感じていた多くの地区の生徒がいる。「私は今まで差別を受けたことがない」と感じていた生徒がいる。これまでは多くの生徒が差別をしたことがないといい、建前の発言に終始していた授業が初めて崩れた。自分の差別心と向き合うのはつらい。それ以上に家族の差別心に触れることは身を切られる思いがする。父のこと、母の言葉を出していくことは自分のことを語るよりつらい。ASの発言は大きな波紋を広げた。一瞬、氷ついたような状態がうま

れた。しかし、その内容に驚くことはあっても、ASを責めるものはいない。大好きでたまらない父母、その父母の語る言葉、それを悲しみ乗り越えようとするASの姿勢がみんなの心を打った。涙を流しながら自分の心をさらけだそうとする、ASやSN、YIの言葉であった。

○ しかし、そうはいっても発言の内容は地区の生徒にとって衝撃であった。今も残っている差別が初めて自分たちの目に見えたという生徒も多い。体が震え、何度手を挙げて意見をいおうと思ったか、しかし、手があがらなかったという。今までは漠然としか見えてなかったものが見えだした授業であった。みんなの言っていることを言葉のままには信じられない。しかし、それではいけないと葛藤する姿がある。そこに私たちは、生徒が感じている差別の厳しさをみる思いがする。授業後の地区の生徒の感想がある。

「今日の全体授業の時『私と部落の人が結婚したら?』と、それで『汚いから、いやらしいから』と。僕はその時、思わず手を挙げ『なぜ?部落の人はそんな人ばかりなのか?汚い、いやらしいとはどういう意味なんだ!』ということを知りたかった。なぜ、手を挙げることができなかったんだろうと後悔しています。この気持ちは『私』が家に帰り、晶子さんらになぜ言えなかったのだと後悔した気持ちとまったく同じだったのではないかと思います。『私』はいろいろ考えた上で差別に立ち向かおうとしました。僕もこの『私』と同じように差別に立ち向かいたい。」

「3年になってみんなの意見を聞いたり勉強していくにつれて、逆に怖くなってどんどん逃げだしてしまっていた。そして今日の全体授業の時、やっぱり逃げてはいけないと思い発表しようと思った。心臓はドキドキして冷や汗がでてきた。けど、手は水ついたように動かなかった。今日少し泣きそうになったけど、こらえて泣かなかった。YさんやI君は偉いと思う。自分の思ったことを素直に言えるし、みんなの意見をわかっている。私はとてもじゃないけど受け入れられない。みんなの意見を『本当にそう思っているの?』って思って素直になれない。時間はかかると思うけど素直に聞くことができるようになると思う。」

次は地区外の生徒の感想である。

「今日の全体授業はすごく苦しかった。言いたいことはいっぱいあったのに、涙がでてきそうになって何も言えなかった。なぜかわからないのに涙ばかりこぼれてくる。苦しいけれどすごくうれしかった。」

○ 「本音で意見を言おう」とよく言われる。しかし、本音の語らいはともすれば現状を認めなくさめ合いになるだけのことが多い。今日の授業においては、自らを越えようとするための本音のぶつかり合いが見えた。自分の「本音」を見据えそれを越えようとしてこそ話し合いが意味をもつ。

③ 「娘の遺してくれたもの」全体授業(授業者 仁木教諭 平成3年5月23日)

【授業記録 — 抜粋】

T 今、みんなにとって同和問題って何なんですか?みんなの考えを言って欲しい。

Y Y 私の考えている同和問題の授業とか学習というのは、私もそうなんだけど部落出身でその「部落」という枠の中にはめこまれてしまって、身動きがとれないっていうか、そんな感じがあるんだけど、こういう学習を積み重ねていっきょって、ほんで「部落の人じゃ」という見方

がなくなってみんなが楽な気持ちで、明るく幸せに過ごせるためにも必要と思う。

- Y I 私は全体授業をする前にこう思っていたんだけど……。今日の全体授業は、真面目にせんとうか、発表せんとうかと思って……。この前の時、遊んでいる人とかがいて、なんぼ頑張ったって応えてくれる人がいるけん、私やだけが、私やだけではないけん、やりりょったらしんたいと思って、黙っておろうというか、「もう、しんたいわあ」という気持ちだったんだけど、やっぱりみんなの意見をきっきょたら、手を挙げずに折れんようになったけん。この前の時、ある子に聞いたら「手を挙げずにおれんようになった、って聞いてうれしかった」と聞いたけん。やっぱり、誰かが先頭切っていかなあかんと思って……。私にそれができればという気持ちで頑張っています。
- K S 私は同和問題について…目標がないから…何も無いけん。発表する資格などない……。だけど発表せんならよけいに……。
- S E 私は3年生になるぐらいまでは、この授業、この前の授業を見ているときになにか罪悪感みたいなものを感じて……。今までの自分を反省しているんだけど……。
- Y I さっきのK Sさんの意見についてなんだけど発表することはそれなりに考えていることだし自分の本当の意見を言って、もし人が傷ついたとしてもウソついてヘラヘラ笑って、結局自分から差別していくよりもよっぽどいい。
- S E 私もK Sさんの意見についてなんだけど、私もK Sさんと同じようなことで悩んだことあるんです。何も考えたくないんだったら、こんな授業しても意味がないと思うんです。でも、何も考えたことない、ということはないと思うんですよね。こういうふうに発表するということは。だから、それなりに自分の考えがあるということは、今みんなに自分の気持ちをわかしてもらえんということだから考えていないというんじゃないかって、K Sさんみたいに私はほとんど発表できないから、そういう点でK Sさんの方がすばらしいんじゃないかって思っています。
- A S 1年の時あまり勉強してなかったから、そのことが差別だとはわからないまま差別していた。2年になって全体学習をしだして最初はしんたいと思いながら聞いていたけれど、みんなこの頃発表しだしていろいろわかるようになった。一人一人が発表することによって仲間の輪ができてつあるように思う。
- T みんなが自分の本当の気持ちをだしていく。そのことによって何かプラスになっていく。みんながこれだけ真剣になって考えてくれることがものすごくうれしい。先生もそうなんです。ある先生もそうだった。誰かがこんなことを書いてきた。「親から、あっちの子と付き合いれんと言われた。私はどうしたらいいのでしょうか。」こう問われたら、もうボーッとしとれんという話をしていました。先生たちもタケノコの皮がはげるように、一つ一つはがれていってるんですね。
- Y I 「ねんりん」とか見よっても、みんなイニシャルとかで書いてあるでしょ。名前隠すということがすごいショックなことがある。うれしいときもあるけど……。私、人から評価されるようなことしとらんのにと思ってK Sさんみたいな気持ちになる。先生が言うてくれたように、もうせんでええわ、という感じが多くなって、今、見よっても遊んでいる人を見てごっつい腹が立つ。もっとみんなが真剣に取り組んでくれたらと思う。そのためには自分がしっか

りして、ちゃんと頑張っていきたい。

YM 学習会でN先生に部落出身と教えてもらったけど、自分自身が差別していたと思う。中2の時から真剣に取り組み出した。それまでたくさんの全体授業があったんだけど、せなしょうないけんという気持ちで適当にやっていた。しかし今では、全体授業に真剣に取り組めるようになってきた。みんなの意見が聞けてうれしい。

【授業後】

- この全体授業で2人の生徒が初めて自分が部落の生まれであることを言葉に出していった。Y子は「私には本当にいい友達がいる。支えてくれる友達がいる。私が部落出身と言った後、M君が同じように言ってくれた。それからSさんやIさんの発表もうれしかった」という意味のことを言っている。一つの発言に対してそれに応えていく発言があってこそ連帯感が生まれる。M男はすでに学級においては部落宣言をしており、また前回の全体授業の流れからいってもこの授業における宣言はごく自然に感じられた。地区外の多くの生徒も自然な受け止めをしていたように思える。しかし、学年全体の場合での宣言の持つ意味はやはり大きい。多くの地区の生徒は息を詰めるように聞いていた。「2人はすごい。私にはまだ……」というのが多くの地区の生徒の感じ方であった。
 - しかし、この2人の発言はその後の地区の生徒に大きな力を与えた。この発言を受けて、その後の学級の話し合いにおいてさらに本音の話し合いが深まり、自分が部落の生まれであることを話していく生徒が出るようになる。それらがまた全体学習を深めるエネルギーになっていく。
 - 「全体学習の場で本音を出していけることがすばらしい」といわれることがある。しかし、私たちはこれまでの実践を通じて、学年全体の場合だからこそ本音を言っても必ずそれを支えてくれる友がいることを確信することができたのだと思うようになった。考えや感じ方のよく似たものは全学級に散らばっている。また、クラス替えからまだ間のないときであれば学級よりもむしろ気心の知れた友のいる全体学習の場が発言しやすいということがあるのだろう。その発言によって学級においても輪を広げていくことができていくようになる。
 - 「今日強く思ったことは、黙っていることが一番悪いと思いました。応えが返ってこないことほどつらいことはありません。やっぱり、同じことをだれかが言っても「わたしもそうです」というように、発表できるようにしたいです。『同じだからいいや』と思っていてもわかっているのは自分だけで、他の人には何も伝わらないから。みんなを信じて頑張っていきたいです。いつかみんなの前で私の思いや苦しんでいることを聞いてほしいと思いました。M君やYさんも他の人たちも私たちを信じて話していつくれたのだから。」
- 「私は今まで同和問題学習は、あまり自分には関係ないと思っていたけど、自分の周りに真剣に取り組もうって人たちがたくさんいて、M君やYさん、まだ他にもたくさんいるけど、支えていくことができるのかって思う。今までの自分に腹が立って腹が立って反省ばかりしていた。私に本当に人の気持ちがわかっていけるときが来るのか不安な気がする。でも、私も友達の一人として、一緒に頑張っていきたいと思う。」(「あゆみ」より)

(5) 全体学習から学んだこと

○ 全体学習を終えての生徒の声

- ・ 「今日の全体学習は最も心に残った。自分でも心の面で最も成長したところだと思います。全体授業をするたびに少しずつ部落差別を考える範囲が深くなっていき自分もその中へ段々深く入っていくような気がします。」
- ・ 「今日6時間目に話をしたけれど、私は資料読むたびに感想を書けと言われても、書くことはもうありません。今まで書くことがなくて、先生に怒られないようなことばかり考えて書いていました。でも今日の全体授業はとてもよかったと思います。みんなの考えがでたときとても納得ができました。身近な差別をなくすのだったら、話し合いを続けていたらと思います。私は話す時は手がふるえるけど、自分の言いたいことは言えるようにしたい。」
- ・ 「今まで全体授業をしてきたけどとてもすばらしいと思います。だけど意見のかわしいいの中で「部落」「部落の人」とか聞いていると、自分は部落出身の一人として腹立ちが込み上げてくる場合があります。僕だけかもしれないけれど、聞いているとやっぱり、自分が一つの枠に入れられているような気がします。でも、こういうふうに「あゆみ」に「自分は部落だ」と書けるのは、いままでしてきた同和問題学習のおかげです。」
- ・ 「この頃、全体学習で、同和問題学習が段々エスカレートしているように思える。特に、B組のIさんなんか堂々と胸張って発表しているように思うし、みんなの発表が、話し合いに変わってきている。それだけみんな心を開いて、みんなを信じることができるようになってきているから、次々に手を挙げることができるのだと思う。こんなに熱くなって発表したいと心から思ったことはなかった。」
- ・ 「弱い心に負けそうになったときは、ここに返ってくればいいと思う。そしたらまた闘う力がでてくると思う。そんな心の支えを見つけるためにも。この授業をやっている理由の一つだと思う。だから残りの6カ月間を一生懸命に頑張りたい。私は自分が傷つくことよりも、他人を傷つけることを恐れるような人間になりたい。そういう友達関係でなくてはならないと思った。」
- ・ 「今日の全体授業もすごかった。それにしても、差別の本体は何なんだろう。みんな支えあって頑張っている。たくさん大切な仲間とともに、僕も頑張っていこうと思う。」
- ・ 「これだけ同和問題学習に真剣に取り組んだことは初めてです。全体で取り組んだことで、どれだけ必死になったことか。やっぱり、言葉だけの形で残すのはいけない。当たり前のことだけど、もっともっと堂々と行動に表したい。」

○ 私たちも生徒も全体学習を通して多くのことを学んだ。

- ① 全体学習は同和問題学習に対しての生徒の意識の変容に大きな力となった。それは、全体で取り組むことによる連帯感の芽生えとあいまったものである。学級単位であればここまでの盛り上がりはなかった。「みんなでやっていく」ことの意味は、中学生にとっては我々教師が考える以上に大きい。
- ② どの学級も同じレベルにおいて同和問題を考えていくための力となった。学級での取り組み — 全体学習のサイクルはどの学級も同和問題については同じ内容についておなじレベル

で考えることにつながる。一人の問題が185名全員の問題となり、一人の問題提起が全体をゆり動かすことになっていた。

③ 全体場で発言することの意味は大きい。今の生徒にとって同和問題にける実践とは自分の考えを發表し、發表する中で何度も何度も考えていくしかないのではないかと思う。全体場での発言は生徒にとっては生徒なりに責任を伴うものである。そういう自覚が生まれ発言がある。これらの授業を通じて多くの生徒の部落宣言があった。個人的に部落出身であることを打ち明けられた生徒がいた。私たちが生徒も「信頼」という言葉の重み、それに伴う苦しさもつかんでいったように思う。自分たち自身の問題として考えざるを得ない状況はそうした中から生まれつつある。そのことを大きな一歩であるとする。

④ 全体学習を生徒の話し合いに止めず教師自らも参加していくことによって、教師・生徒が一体となった意識の芽生えがある。私たちは生徒の前で話していくことの大切さ、苦しさを知った。「今日の全体学習のときにA先生が自分の本当の気持ちを言ってくれたことが本当にうれしかった。先生たちも頑張ってください。お願いします。私たちが、もっともっと頑張らなくては行けないと思います。先生は負けていられないからね。」という生徒の言葉である。

⑤ 私たち教師にとってもこの全体授業は大きな力となった。一人の担任の公開授業に続いて全体授業があるため、全て自分の研究授業と同じものとして取り組まざるを得ない。常に資料についての話し合いがあり、生徒の実態についての意見の交換がなされた。苦しいことでもあった。丸岡さんの「ふるさと」に取り組もうとした。よくわからない点が多い。そうしているとき、同僚の一人がそのバックになる丸岡さんの講演記録「同和教育への希い」を教えてください。みんなでそれを読む。まだわからない点がある。そこから「怒りの砂」を勉強することにつながる。私たちの学習はこのようにして進んでいった。全体学習がなければこまでの取り組みができたかどうか。全体学習は私たちが生徒に教えられる形で、すすんでいった部分も多い。

(6) 今後の課題

① 全体学習の大きな特徴は、それが「集会」でなく生徒による授業の参観から始まることにあった。他の学級の授業を通して友達や先生の考え、思いをつかみ、自分たちの考えを深めていくこと。「生徒による授業の参観」の効果さをさらに考えていきたい。生徒に授業を参観させることの意味は何か、それと後に続く全体学習はどのように関連づけられるのか。その点で、まだまだ十分な検討がなされていない。そのために、全体授業の指導が指導者のその時の感覚や感情に任されてしまったことがある。全体授業は指導案を作成せず望んだがそのことの是非も結局は全体授業の性格を明確にするところから導かれることであろう。今後さらにこの形態を発展させるためにはこのことの説明が是非とも必要である。

② 形式的な発表訓練の必要がある。形式的というのは声の大きさであり、挙手であり、起立した姿勢などである。これらを、内容と切り離れた形ではなく並行して訓練していくことが求められる。自分の意見を発表するとはどういうことなのか、そのことの意味をたえず問い続けなければならない。

- ③ 全体学習における発言内容が同じ生徒の同じような内容に片寄る傾向が表れだした。本音を言い、互いに自分をさらけ出そうとするところまではきた。そこから、数的にも、質的にもやや立ち止まりの傾向にある。まだまだ、口を開くことのできぬ多くの生徒に全体場で発言を求めるには、結局は私たちの同和問題にかける熱しかないと考えたとき、そのことは私たち自身の取り組みの再検討を迫るものである。また、「思いを語ろう」という形で始められた全体授業であったが質的に向上していくためには、その「思い」を支える、理論的な学習も必要になってくるだろう。授業内容の検討も必要である。

3 学年部落問題意見発表会

- (1) 全校で部落問題意見発表会（6月20日）が持たれる。これは各学級から1名代表者がでて全校生徒の前で自分の意見を発表するものである。私たちは、全体学習の延長として、また全校の意見発表会の予選的なものとして学年の意見発表会を持つことにした。「今までの同和問題学習から得たもの」、「自分と同和問題とのかかわり」といったテーマで今の思いをそのままに綴らせ6月6日に2時間をとって各学級から3名、計15名の意見発表とした。

(2) 取り組み

それまでの全体学習の場においては何名か部落宣言をした生徒がいた。この意見発表会において3名の地区の生徒が新たに自分が地区出身であることを宣言していこうとする。

- ある学級ではそのことを学級の問題としてとらえ、Y子が宣言をすることについて話し合った。

「まだ、早い」という意見がある。「Yさんが発表するというなら、私たちはそれを支える」という意見がある。みんながどう考えるか、どうすべきかを自分の問題として考えていった。「今日6時間目にYさんのこと中心にして話し合いをしていたけど、こんなことしてYさん大丈夫かなと思った。でも、Yさんはあまり気にしていない様子だったし、私は自分の考えを言った。私にとっては一番仲のいい友達だし……。頑張りたいと思う。みんなが、本当に真剣になって考えてくれてるのが自分のことのようにうれしかった。」というK子。当日のY子の発表をドキドキしながら見ていた級友の姿があった。「今日の意見発表を聞いて、やっぱり同じクラスのYさんの心が残った。いっぱいいっぱい、私は同和地区ということを知っていた。びっくりした。でも、すごいと思った。でもYさんが、どれだけ自分と闘っているかがわかったように思います。私も友達として一緒に頑張る。」。一人の部落宣言を一人のものに止めない活動を目指していかなければならない。そこから、支え、支えられるということを考えていきたい。

- M子は昨年の全体授業で自分の思いを語ろうとして涙につまった生徒である。そのM子が言葉にだして自分の気持ちを話そうとした。

「いろんな人の意見を聞いていてなんかM子さん変わってきたなあとと思った。初めは自分の出身地を言って泣いて、ほれから差別されたことを言って泣いて、自分の本音を言って泣いて、なんか、ちょっとずつ強くなっていきよる。」と友達の感想にある。

M子は自分の発表の意志を担任に伝えた。担任はM子の意志を確かめ、家庭訪問をし、母親

とそのことについて話し合う。母親は、どちらかと言えば消極的であったが本人の気持ちを尊重し、部落宣言をしていくことに賛成していった。そこまでに、担任との間でいろいろな話し合いがなされ、母親の受けてきた差別の実態も語られた。「先生、私、せこい。もう、よっぽどM子降ろそうかと思った。」と、涙ぐみながらの先生の話である。私たちは生徒によって教えられ、生徒は担任によっても支えられていく同和問題学習であることを痛感していく。

当日、M子は顔を挙げ自分の思いを語っていくが、「お父さんやお母さんは……」と続けようとしたときにつまってしまった。下を向き、言葉がでてこない。自分のことは胸張って話すことができるようになっても父母の思いに触れようとするのは何よりも苦しい。そんな差別の現実を改めて知らされていく。見ていた教師や級友から「頑張れ！」の声もかかるなか、意見発表を終えた。「Mさんが泣いたとき、僕は『泣くな！』と思った。でも、聞いていて『泣いてしまうよな』と納得した。だけどみんなはどう思っているか知らないけどMさんの後、YさんとEさんが泣いた。僕はそれがいやだった。YさんやEさんがいやなのではない。あの涙がいやだった。僕はM子さんのことを思っているのだったら『M子さんが泣いたのなら、私はあの涙を無駄にしないように、私が泣くのはよそう。』そう思って欲しかった。」これは、同じ地区出身の男子の言葉である。どちらかと言えば、行動面でも問題があるH男の言葉であった。そこからまた、新しい出発がある。

M子の次の日の「あゆみ」

「意見発表会、やっと終わりました。あの言うまへの緊張感が何とも言えないくらい、ソワソワしていました。言い終わった後、先生たちから『本当に良かったよ』と言われてうれしくなりました。私の思いが通じたのかなって思いました。A先生から『なんか、ふっきれたような顔しとるわ』と言われて、本当に私もなんか気持ちがふっきれたようでした。先生、こんないい機会を与えてくれてありがとうございました。」

以上、意見発表会にかかわる二つの事例を挙げた。その他にも、発表会を契機とした多くの取り組みがあった。意見発表会を意味あるものにしていくためには、形式的なものにおおらせないためには日頃の活動に組み込まれ、その一環としての位置付けがなされていることが大切である。

4 仲間の支え

(1) 願 い

「同級生を信頼し『僕は部落出身です』といえることがとてもうれしいです。信頼できる友がたくさんいてとてもうれしいです。今まで部落問題学習をしてきて、自分をさらけ出すことで、友達の大切さというものを学びました。この学習をする中で、自分がすごく変わってきたように思います。今、僕はみんなに部落出身ということが言えて、言いたいことが言える。今の状態だったら、僕は自分をさらけ出すことができると思う。でも、その後僕はどう行動するのだろうか。その場に立ってみなければわかりません。これからいろいろ部落差別にあうかもわかりません。僕は部落出身という重いものを持っている。大切な故郷、友を大切に堂々と頑張ろうと思う。」自分が友に支えられていると感じるときは、自分もまた友を支えているんだという実感。

地区の子どもたちが差別に向かい闘っていくために、自分を語りさらけ出していくには大きな

支えが必要である。地区外の友との本音の話し合いから生まれてくる信頼と友情。それは、全体学習や学級の同和問題学習の場で、生まれつつあるように思う。ところが私たちはこの学習を進めていく中で同じ立場にある、地区出身者どうしの同和問題についての話し合いが意外に少ないことに気がついた。お互いに触れたくないという暗黙の意識が働いていたのだろうか。このことは、部落問題意見発表会において部落宣言の問題について取り組もうとしたときに表面にでてきた。

「従兄弟が同級生にいる。仲も良いし、何でも話すけど、同和問題についてはあまり話したことがない……。 (地区出身の) みんながどう考えているのか知りたいし……。みんなの考えを聞きたい」というA子。部落宣言をしていくには、それを支える同じ立場の友の存在が不可欠である。同じ地区出身といってもみんな家庭環境も違えば考え方も違う。一人の部落宣言は双方からの支えがあって初めて意味を持っていくものである。そのための働きかけが必要になる。

(2) 取り組み

A子を取り巻く環境の中にいる同じ立場の生徒。学級、地域、部活動から比較的A子に近いものの10名あまりと放課後何回か話し合いの場を持った。その中には、担任によって初めて自分が地区出身であることを知らされたB子もいれば、A子の従兄弟に当たるC子もいる。学級においても、全体学習の場においても部落宣言をした生徒はいない。それぞれの担任も話し合いに加わった。

「A子が部落宣言をすることについてどう思うか」というテーマでの意見の交換である。従兄弟のC子にすれば自分自身の宣言に等しい意味を持つ。いろいろな意見が交わされる中でA子の決意をたたえ、支えることが確認されていった。そしてここに参加した生徒たちは後日、自分たちの学級において部落宣言をし、行動によってA子を支えることを示した。同時に自らの生き方として同和問題に正面から取り組むことの決意の表明であったと言ってよい。

(3) 部落宣言をさせることが目的になってはならない。しかし、同和問題学習において本音が語られ、核心に触れるようになり、教師の確固とした姿勢があれば胸を張って自分を語る生徒が増えてくることも多くなる。それはすべて生徒の気持ちに待つべきものである。その時、地区外の生徒はもちろんであるが、同じ立場にある生徒の支えはなくてはならない。教師としてその部分においてかかわり共に学ぶことができていく。そして、その成果を学級に、学年へと広げていかなくてはならない。また、この活動は必要に応じて同和教育主事との連携のもと、学習会における学習と重ねあわせることも必要である。

5 文化祭に向けて

文化祭の午前の部において学級単位の出し物のほかに、学年として全体合唱に取り組むことにした。185名全員で合唱する曲は、「花」と「友よ」。そして、歌の合間に詩の朗読を取り入れた。ある意味においては詩の朗読が中心でもあった。

全員が同和問題学習に寄せる思いを詩で表現した。その内から、4編を選び全校生・保護者の前

で朗読した。また、この全体合唱に入る前の解説文も生徒の手によるものである。

【合唱を始める前に】

私たち3年生は、2年生のときから学年全体で同和問題学習に取り組んできました。私たち3年生はこの同和問題学習によって、学級という枠を超えて一人一人が固い絆で結ばれることができました。私たちはいつのころからかこの学習をしているとき熱くなる自分に気付き始めました。ときには苦しく涙がこぼれそうになりました。そして悲しみや苦しみをみんなで共有していく中から、差別解消への願いはより強くなっていきました。

私たちの仲間の中には、涙を流しながら自分をさらけ出した友がいます。その友を必死に支えるかのように自分をさらけ出した仲間もいます。そんな学習を積み上げていく中から、みんなの中には信頼という切っても切れない絆が育ってきたと思います。私はこの学習と一緒に取り組んできた友を決して忘れないと思います。ずっとずっと心の支えとなって私が人生の峠にであってくじけそうになったとき、みんなと歩んだこの学習への取り組みが私を励ましつづけてくれると思います。私はこの学習と一緒に頑張ってきた友に感謝しています。この気持ちはみんな一緒だと思います。この1学期、大切な友と歌いつづけた歌、「花」をみんなで歌います。

合唱 「花」

同和問題学習を深めていく中で、私たちの中にはさまざまな思いが込み上げてきました。その気持ちを友が詩に表してくれました。その詩を紹介します。

同和問題を学んで

同和問題を学んで

これほど熱くなったことが あっただろうか

同和問題を学んで これほど命の大切さを考えさせられたことが あっただろうか

涙を流しながらも 語ってくれた仲間がいた

そんな友を見て もっと学びたい そう思った

勇気を持って

丸岡さんと出会ってよかったと思う

「ふるさと」の詩を読んだとき

私の中で 革命が起こりはじめた

きっと みんな同じだと思う

「ふるさと」の詩が私に勇気を与えてくれた

私だけじゃないだろうけど

心からあふれてしまうほどの勇気を

丸岡さんからもらったと思う

革命は始まったばかりだけど

みんなかかえきれないほどの
勇気をもって頑張っている
丸岡さんや「ふるさと」の詩に出会えてよかったと思う。

痛 み

苦しいとき 悲しいとき
自分が悲劇のヒロインにでもなったように
自分が世界一苦しいかのように 涙を流す
でも、ほんとうにそれでいいのだろうか 同和問題
涙を流すだけではだめだ 人の痛みが自分の痛みになり
そして、一粒一粒の涙が喜びの涙となるよう
今、団結しよう
悲しみが喜びに変わるまで

涙

「部落」という言葉を聞いて
心が重たくなるのはなぜだろう
悲しくなるのはなぜだろう

この差別のために何人の人が苦しみ
何人の人が涙を流しただろうか
そして何人の人が自らの命を絶っただろうか

私は「部落」を作った人
また「部落」を差別するすべての人を
決して許さない

私たちが流した涙は いつか川をつくるだろう
そして部落差別と大きな悲しみを
水と一緒に流してくれるだろう
どこかへ消してしまうだろう

私は解放の主体者として闘いつづける
部落差別解消の日まで

私たちの大切な友にこの歌を贈ります。「友よ」

合唱 「友よ」

6 学年通信「ねんりん」

昨年度学年通信「ねんりん」の発行は300号を数え、学年末には1年間のものを縮小印刷したものを製本し配布することができた。今年も多くの人々の支えや励ましの中で10月1日現在で151号まで発行することができている。今年もまた、年度末まで発行を続け卒業時には1冊に製本し記念として配布したいと考えている。

(1) 学年通信発行のねらい

- ① 第1のねらいはまず家庭との連携にあるが、家庭や生徒への一方的な指示や連絡におわることなく、教師・生徒・保護者の互いの願いや夢思いを語り合う場として考えていきたい。特に同和問題についての啓発や互いの感想などを積極的に掲載していくことにより、同和問題学習についての側面からの雰囲気作りを強力に進めていく。
- ② 中学3年生は最高学年として、自覚と責任を持って学校をリードする立場にあると同時に、個人的な問題としての進路の選択に関する不安や焦燥、迷いがある。進路決定の問題は本来個人的なものであるが、ゆれ動く姿は共通のものである。互いの本音を通信で紹介していくことによって連帯感も生まれ同じ悩みを持つものとしてスクラムを組んで進むこともできよう。そのための足場として活用していきたい。
- ③ 保護者にはわが子の眼を通してのみの中学3年生でなく、生徒の日記、作文、学校生活の断面などから広く中学3年生を知ってもらいたい。わが子だけでない15歳を感じ、仲間の中で生きる、生徒のありのままの姿をつかんで欲しいという願いがある。
- ④ 生徒は学校行事に対して受け身になりがちである。受け身の姿勢からは得るものは少なくなる。それを払拭し、行事の意味を問い、自らの行事として積極的・主体的に取り組むための働きかけや事後の反省などを取り上げることで、より活力のある学校生活を送るための一助としていく。
- ⑤ 私たち教師集団の学年学級経営の共通理解の場であるとともに、日々の反省と明日への指針を示すものであること。

(2) 留意点

- ① 「ねらい」の根本が「互いの思いを語り、ぶつけあう場」である以上発行回数は多いほうが望ましい。また、ワープロで打った、見た目に整った通信よりも手書きの方に親しみを感じるという意見の多いことを頭において発行を続けるようにした。
- ② 継続させてこそ意味がある。しかも、他の校務をおろそかにすることがあってはならない。学年通信はあくまで、教育活動の補助的手段であって主要なものではない。日常の教育活動の充実の上に立つ通信であってこそ初めて意味を持つものである。その、限界をわきまえた発行でなければならない。
- ③ 学年通信の場合はその作成、発行について学年教師集団の共通理解の上に立つものでなければならない。一人の教師の思い込みや一方的な記事は避けなければならない。常に、学年教師集団に受け入れられ、支持されるものでなければならないのはもちろんのことである。学年教師集団がまちわびるような通信の作成を心がけていきたい。
- ④ 内容については、生徒の声を中心にしつつもできるだけバラエティに富むよう心がけること

7 その他の学年の取り組みと学年行事

その他の取り組みや学年行事について簡単に項目だけをあげておく。

(1) 日常の活動

。「あゆみ」の重視 日常的な家庭訪問 学力保障のための取り組み 月1回の「自由作文」による書くことの奨励

(2) 学年行事（昨年度実施したものも含む）

。学級旗の製作 修学旅行時の「ヒロシマの歌」の取り組み 学級対抗長縄跳び大会
。美味しんぼ大会 遠足とレクリエーション大会 遠足と美味しんぼ大会
。学級対抗球技大会 文化祭演劇への全クラス参加

(3) 登校拒否児に対する取り組み

8 おわりに

(1) 「私は部落に生まれたことをすごく恥ずかしいことだと思っています。なんでかわかりません。あの学習会の通知をもらうとき、なんかとても嫌な気持ちになります。この間友達に『なあ、あの学習会の通知見た？』と聞かれたとき、私は心の中でドキッとしてしまいました。小さいときから部落は恥ずかしいとは誰からも言われていません。でも、勉強しているときとか、周りの人からそう思わせられていると思います。なんか、いつになったらこんな思いせんですむだろうと思います。私はそんな思い詰めるところまではいっていませんが、高校になったとき堂々と『私は部落じゃ』と言えるだろうかと、今とても不安です。でも、勇気をもってちゃんとと言えるように、今から真剣に頑張っていけたらと思っています。」

「どうして同じ土地に住んでいて、同じように生活している人間がたった一言『部落』という言葉だけで、人間としての価値が変わるのですか。おかしいですね。へんですね。一つの言葉で人間が人間でなくなるなんておかしいですよ。世の中はどうしてこう間違ったことばかりなのです。人間って正しいことばかりじゃないんですね。いいか悪いかわからないときもあるんですね。」

これは、同和問題学習に取り組み初めてまもないころの生徒の「あゆみ」である。私たち教師が性根を据えてかかることの意味を教えてくれた。このままではつぶれてしまう生徒が出る、中途半端な同和教育に終わってはならない。私たち自身の生き方をとわれるのだということの意味がこの時になってわかり始めた。生徒に私たちの生き方といい続けられてきたような気がする。

生徒の言葉が支えになり、互いに励まし合うことよっての取り組みであった。「この子たちに悲しい思いをさせたくない。」そこに原点があった。取り組みば取り組みほどどうしていいかわからなくなることも多い。しかし、これからもなお一層多くの人の支えの中で部落問題の解決に向けて実践を続けていきたい。

(2) 教師間の連帯感・スクラムの大切さを痛感した2年間でもあった。大学卒業後担任もしたことなくの先生たちが指導案を作成し、研究授業に取り組んでいった。それらの姿が私たちにも生徒にも大きな力を与えてくれた。私たち自身が一人の人間として同和問題の解決に向けての変革することのない信頼と連帯感をもち続けていかねばならない。